

大菩薩	奈良子川から姥子山	No.079
-----	-----------	--------

昭和42年2月18日

昨年11月の冬山偵察以来久しぶりの単独行。今や常連となった高尾5時24分発松本行で猿橋駅には6時08分に到着。西に真っ白く雪化粧した小金沢の山々を眺めた後、国道を東へ歩き猿橋車庫へ。田無瀬(たむぜ)行のバスは6時に出てしまい、後はしばらくしない。仕方なく葛野川に沿って歩くことにしたが、時間的にはちょっと余裕を失ってしまったので、少々ハイピッチで歩くことになった。

水辺が凍りついたいかにも冷たそうな川の流れを見下ろしながら歩くうちに田無瀬に到着。

葛野川の支流である小俣川に沿った道に入ると、のんびりしたどことなく寂しい山道。奈良子の集落は茅葺屋根が並び、近頃では珍しくなってしまう味わいのある美しさである。また奈良子から矢竹にかけての集落は、昔の大家族制を感じさせる立派な家屋が多く、集落と家屋などについて興味を持って研究するには最適の場所のように感じる。朋文堂の「大菩薩連嶺」という本にも書かれているが、南大菩薩の山歩きにおける興味のポイントになるものだと思う。

コバルトブルーの空には一点の雲もなく、畑の縁に腰を下ろしていると春の野辺の心地がしてくる。

海拔582mの矢竹の集落を過ぎると段々に谷は狭くなり、やがて菅沢の分岐点にかかる本谷橋、時刻は9時。ここから雪は足首を没するようになり、道もあまり明瞭ではなくなってくる。握り飯を二つ食べて、スパッツを着けて9時半出発。

どの尾根を登ろうかとししばし迷った挙句、登り尾根の一本東の尾根を藪こぎすることにした。

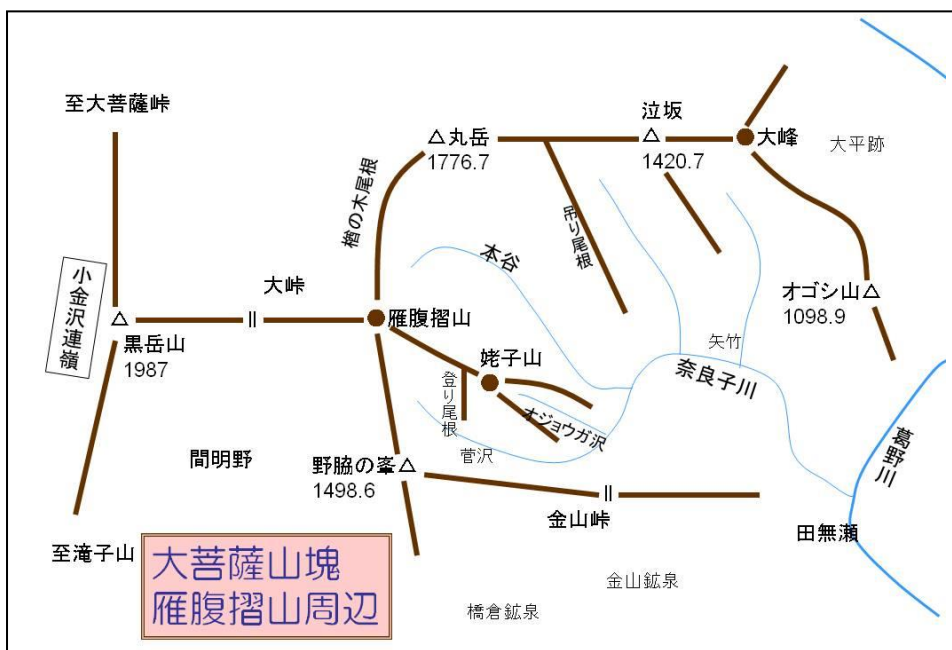
しばらく藪をこいでいると、時々踏み跡らしきものが見つかるが、また消えてしまう。今回の山行は藪こぎを覚悟した計画なので、「予定通りの行動」で、落ち着き払ったもの。

頂上が近くなると、所々に5mから10mの岩が立ちだかるようになり、岩登りまで楽しませてくれる。

岩をいくつも登っていくにつれ、富士を頭にその周囲の山々が白い素肌を段々に現し、しかも周囲には人っ子ひとりいない。じつに心うれしい山である。あまり景色が良くて静かなので、途中の岩場の岩陰でトカゲを試みた。なんと一時間も眠ってしまい目が覚めて大慌て。

そんな訳で姥子山の山頂に着いたのは14時25分。1514m(\*註)、どちらかと言えば小さな山に属す。北には、あの9時間の藪こぎをさせられた檜の木尾根が、そして北西に雁ヶ腹摺山。

雁ヶ腹摺山から見下ろすと実に小さなタンコブのようでしかない姥子山、今登りついてみるとタンコブどころ



ではない中身のある立派な山だ。大菩薩には珍しい立派な岩場を持つ山で、しかも人があまり寄り付かない山。来て見てよかった。

富士の中腹に雲が現れ始めた。握り飯の残りを片付けて、下りはオジョウガ沢から朝の本谷橋へ。後日調べて見てわかったことだが、オジョウガ沢(お浄ヶ沢)の奥にある岩屋が「姥が懐に赤子を抱く」形に似ていることから山の名が付いたこ

## 踏 み 跡 < My mountains >

とがわかった。出かける前に知っていれば岩屋を探したのに、残念。

16時、菅沢出合いの橋の袂でスパッツを外して最後の小休止。激しい藪コギでズタズタになってしまい再起不能になってしまった。

16時15分に出発し、往路同様に田無瀬まで歩いた。田無瀬に17時45分着、大月行のバスに間に合いホッと一息。岩殿山の裏を回り国道に出るころにはもう真っ暗になってしまった。

大月駅に18時19分に到着。上り電車が行ったばかりだったので、国道に出てラーメンを食べて19時11分発の電車に乗った。

以上

\*註:姥子山の高さ

当時の資料では1514mとなっていた。

2004年版日本山名事典及び2023年版の国土地理院地形図では1503mとなっている。

(修正・更新:2023年11月)